

「異中国」の卑小さと文学

閻連科（訳Ⅱ和田知久）

ご臨席の皆様、

日本に、名古屋に参りまして、こちらの環境、気候、そしてこのような品良く落ち着いたキャンパスに優れた気概と学識教養に溢れる愛知大学の教員・学生の皆様を前にしますと、時代も空間をも飛び越えてしまったかのような感覚を抱きます。今から一六〇〇年ほど前の、中国は東晋時代の大詩人である陶淵明の詩句「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」「誤りて塵網の中に落ち、ひとたび去って三十年」を想起いたします。陶淵明の「桃源郷」を想起し、私たち人類

にとつての最も美しいユートピアを想起いたしますのは、まさに「今夕何れの年か知らず」「錯^{まちが}いてこの郷を故郷となす」であります。それと同時に、ここに居りますと、私は香港も想起いたします。香港科技大学の海原、山並み、建築と気概と学識教養に溢れる教員・学生を想起いたします。それでは、本日の講演は、香港からお話しはじめことにいたしますしょう。

今年のはじめ、私はどういわけか香港科技大学に招聘されて客員教授を務め

ることになり、創作について講義いたしました。かの地は風光明媚で、教員・学生の人柄もすぐれていて、カリキュラムもわりと楽だったこともあって、かの地ではひととき「桃源郷」「ユートピア」のようなすばらしい生活を送ることになりました。読書し、創作し、授業を行いました。人生まさに仲春の如しであり議論する、

本稿は二〇一六年一月五日に愛知大学車道キャンパスにて開催された二〇一六年度中国現代文学研究者懇話会「作家 閻連科氏を迎えて」における講演を採録したものである。

閻 連科[Yan Lianke]

作家、中国人民大学教授。

1958年河南省洛陽市生まれ。河南大学在学時代から小説の発表を開始し、1998年魯迅文学賞をはじめ、数々の文学賞を受賞。“荒誕現実主義大師”と評され、超現実主義的作風で中国の社会と人々を描く。数々の発禁処分を受けながらも執筆を続け、2014年にはアジアで二人目となるフランツ・カフカ賞を受賞。中国の作家として、莫言に続くノーベル文学賞候補と目されている。



(主な邦訳作品)

『人民に奉仕する』(原題『為人民服務』) 谷川毅訳、文芸春秋、2006年

『丁庄の夢—中国エイズ村奇談』(原題『丁庄夢』) 谷川毅訳、河出書房新社、2007年

『愉楽』(原題『受活』) 谷川毅訳、河出書房新社、2014年(2015年 Twitter 文学賞受賞)

『父を想う—ある中国作家の自省と回想』(原題『我与父輩』) 飯塚容訳、河出書房新社、2016年

『年月日』 谷川毅訳、白水社、2016年

『炸裂志』 泉京鹿訳、河出書房新社、2016年

ました。ちょうどその春たけなわ花咲き誇る五月、ある日の夜、朝の五時頃くらいまでぐっすり眠っていて、ちょうど幸福な夢に安閑と浸っていた時、枕元の携帯電話が鳴りました。着信音は、私が取らないでいると、いつまでも止むことなく鳴り続けます。結局、堪えきれなくなつて、うんざりとしながらも身を起さずしかありません。携帯を手に取りふと見ると、それは私の姉が中国の内地——私の河南の実家からかけてきたものでした。何の用なのかと尋ねますと、母親が昨日の夜に夢を見たのだと姉は言います。夢では、私が創作で大きな誤りを犯し、嚴重な処分を受けた後、牢屋に入れられるのを恐れて、地面に跪き叩頭して許しを求めるのですが、結局、額から鮮血を滴らせて、ほとんど気も失わんばかりだったということです。それで、母親は何がなんでも姉に夜も明けないうちから電話をかけさせて、事の次第を聞いただそうとしたのです。

最後に、姉は電話で私に尋ねます。あなた、大丈夫なの？

大丈夫だよ、元気にやっつて、と私は答えます。

姉は言います。本当に大丈夫？

私は答えます。本当に大丈夫だよ。どこも問題ない。

結局、姉は電話を切りました。私はいいいますと、そのあと、私が創作を学びはじめた頃のことを思い出しました。小説の中で、故郷ゆかりの宋代理学の大家である程頤、程頤と彼らの子孫を描いたところ、程氏の子孫たちは、私が彼らの祖先を賛美してほしくないだけでなく、先祖の大学者二人を諷刺さえしていると考え、程氏の子孫全員に招集をかけることを決めて、仕返しに私の郷里に殴り込んで、あの「創作好きな小童」に教諭してやろうとしたことがあったからです。その後、私の家族や友人がさまざまなルートを通して、程氏の人たちに詫びを入れて、関係を取りもつて、この件はようやく大事にはならず済みますことができました。

続けて、私はある小説の中である人物を描きました。脚に障害があり、歩くの

に不自由なこの人物は、郷里の読書好きな人によって見当が付けられて、私が村長の家の息子を描いたのだと考えられたのです。というのも、村長の家の息子は確かに歩くのに不自由で、脚に障害があったからです。そこで、村長は大いに機嫌を損ねました。正月に帰郷した際、母親は戦々兢兢として、煙草、酒などの贈り物を準備してくれ、兄に私を連れて村長の家へ詫びを入れに行かせました。

私のはつきりおぼえているのは、大晦日の晩に、村長が寢床の縁に腰掛けて煙草を吸い、私と兄はずっとその前に立って積明と反省を行いました。小説に描いた事と村の人びとの生活とは少しも関係がなく、いずれもい加減にでつち上げた（虚構の）ものであると云うのですが、村長はただ次から次へと煙草を吸い続けるだけです。彼はものも言わず、我々を見もしません。そのせいで室内は息が詰まりそうな感じでした。私と兄は息が詰まったせいで、村長の家で卒倒してしまふのではないかと気がかりでした。時間はかくも緩慢に、重苦しく、滞りながら

進んでは止まり、淀んでは動きませんでした。一秒一秒が無限に引き延ばされるようでした。最後になって私は村長に断言しました。今後の創作では、故郷や村に少しでも関わるような良くないことは絶対にもう二度と書かない、良いことのみ書いて、悪いことは書かないと、私は断言しました。村長はようやく寢床の縁で煙草をもみ消し、小さく沈んだ声で、単純ながら力強い言葉を言いました。

「——もう帰れ」

そこで、私と兄は赦免されたような形になり、ついに呼吸することができ、その場を離れることができました。

村長と村長一家の大きな屋敷に別れを告げ、私と兄は大晦日の夜に歩みを進めました。爆竹の音が絶えず大通りに鳴り響くなか、兄が「はああつ」と息を継ぐ様は、まるで新しい人生が始まったかのようでした。私ほというと、爆竹の音と光に満たされた新春の夜に、冷たさと孤独と寂寥を感じていました。さながら海水が私をあの茫茫たる光の中に呑み込んでしまったかのようにでした。そしてそれ

からは、私の創作は永遠に何かを避け、何かを隠すようになりました。幼い子供が、おどおどと、あたりに注意を払いながら、一人ぼっちで道を行く時に、足下の蛇や天空の鷹、道中に突然現れる狼や犬などの自分では防ぎきれない野獣を怖がるようなものでした。これはちやうど人生の道程において、何かを怖がれば怖がるほど、うまい具合にそれに度々出くわすのに似ています。

私の創作は、私が何を書いたかではなく、何を書かなかったか、つまり何を省いたのか、何を避けたのかにあると、私ははずっと思っています。私のこれまでの創作は、実に書かずにはいられない、省けない、避けられない時に至って、ペンを握らざるを得なくなり、書かざるを得なくなるのです。そのため、私の芸術は私の作品の中にあるのではなく、私の作品の外にあると、私は常々冗談で言っています。しかし、そうだから、いやそうであるにもかかわらず、私は絶えず議論の的にされ、禁止され、今まで、この半生の中で、自らの母語の国と読者にお披

露目できない本が七、八冊あります。また、それらの読者が読みうる本にしても、どんな時も、どんな作品が出版されても、私の親しい人、友人そして良識豊かな出版者たちをいつも、板挟みにさせ、心中びくびくときせてしまうのです。このように一年、二年、三年、五年、そして十年、二十年、三十年以上にわたる我が半生の文学は、常にこのような経過をたどり、このように創作してきたのです。それだからこそ、今年五月のある晩に、私が創作でとてつもない過ちを犯し、牢屋に入れられるのを恐れて、その場に許しを求めて叩頭し、頭から流血した夢を母親が見た時に、夜中に姉に電話をかけさせたりもするのです。そしてこの電話で、私は最後に思い至ったのが次の五文字の言葉です……

卑小な文学

それ以来、この「卑小」という二文字、「卑小な文学」という言葉が、私の脳の深い皺に刻まれて、日々、時々刻々と文

学のことを思い起こすたびに、それは浮かび上がってきて、なかなか消え失せようとしないばかりか、ますます鮮明に尖鋭になり、まったく煉瓦の壁面に打たれた釘のように、煉瓦はもうぼろぼろになっただけで、錆びた釘はなおもその壁面にくつきりと突き出ているのです。今に至っても、私がここで講演をしていても、蜂が群れをなして巢から飛び立つように、朝に鳥たちが羽ばたく如く、「卑小」「卑小な文学」は私の頭脳の中でブンバタバタ音を立てているのです。

そうではありませんが、日本で最も古く、最も偉大な作品である『源氏物語』と中国で最も偉大な小説である『紅樓夢』について、その創作と意義には多くの類似したところがあると私は思います。しかし現在、紫式部が創作についてどう語ったかは私たちは知りませんが、『紅樓夢』の作者、曹雪芹は非常にはっきりと後世の人に告げています。彼が創作をするのは、「一技成る無く、半生潦倒す」(訳注「一芸すら秀でることなく、落ちぶれた半生を送る」)ればこそ

「二集を編んで、世の目を悦ばせ、人の愁いを破らん」がためでした。私たちはここから、彼らによる偉大なる作品からも知るようになるのです。紫式部にせよ、曹雪芹にせよ、彼らの創作は、「世の目を悦ばせ、人の愁いを破らん」という非常にはつきりとした目標を持つていたのです。この創作の理念において、比較をしてみます。私たち、今日の同時代中国の文学や作家と比べてみますと、創作に関して、紫式部と曹雪芹は、人生に對する劣等感を些かも抱いてはいないだけでなく、文学に對しても些かも卑小さを感じてはいないというをはつきりと感じることができません。しかも、自信に満ちあふれていて、文学の尊厳や文学の崇高さを信じてさえもいます。

しかしながら今日の中国文学では、私たちのいづれの作家の天賦の才知も、紫式部や曹雪芹と同列に論じられるものではないことに加えて、文学の理念や尊厳に對して彼らのように崇高なまでの信頼を抱いている者がいるでしょうか。自らの創作を「世の目を悦ばせ、人の愁いを

破らん」がためであると敢えて言い得る者がいるでしょうか。文学が現実直面し、作家が権力に直面した時に、文学と作家に卑小さを感じない者が何人いるでしょうか。作家と文学は、今日の中国においては、まったく塵芥のレベルにまで貶められてしまい、たとえ評価が上がってきたかと思えたとしても、社会が発展し、他者が前へ進もうとする際の足手纏いになってしまふのです。

今日、私たちがここである種の文学について議論し、その文学の可能性について議論しても、場所を変えて中国にもどすと、蛾が好む光を蟻が崇拜しているのだとか、ジョージ・オーウェルの『動物牧場』の中の動物たちが抱いた未来への憂慮や憧憬だと、多くの人が思うでしょう。しかも、今日の中国文学の理想や夢、崇高さとか、愛、自由、価値、情感、人間性や精神の追求などといった人間に對する認識は、現実においては、あらゆる金銭、利益、国家、主義、権力と

渾然一体となり、分離できないものがありますし、また分離することが許されないものでもあります。それゆえ、ある種の作家と文学が今日の中国の現実において存在することは、とりわけ時宜に合わないかのように見えます。雑草と都市の中央公園の如く、イバラの木と都市の中央森林の如く、卑小さは荒野と遠郊にまで至り、人びともそれが現実のあるいは大地に居場所を得たかのようにさえ思うでしょう。目下のところ、中国の文学は、真に世界文学を構成しうるのか、わずかにアジア文学の一部に過ぎないのかはさておき、文学に関わる少なからざる作家たちが、それぞれそのような場所において力なく卑しげに創作をし、ちょうど今流行の「世の中に無関心な人」のように、賑やかな集会をやっている脇の道を歩いています。国家においては、それは広大な花園に生える数株の雑草に過ぎず、芸術においても、作家個人の一の生存と呼吸に過ぎません。確かに言えることは、中国の現実が私たちの言うような文学を今でもなお必要としているのか

ような真実と真相を描く芸術的な傑作を描くことができたのでしょうか。かたや中国人は、旧ソ連やロシアとほぼ同じような苦難を舐め尽くしているにもかかわらず、そのような作品を持たないのでしょうか。

とりわけ社会が今日のように発展してきた中で、中国文学は依然として厳格な検閲の下にあるとは言うものの、今日の中国の作家による創作と社会的な環境は、数十年前の「文革」や「反右派闘争」の時代とはまったく異なっていますし、さらに旧ソ連のような白色テロやシベリアの収容所もありません。しかし私たちは、今なお、ソルジェニーツィンを産み出していませんし、パステルナークも産み出していません。また、ブルガーコフもルイバコフもヴァシリール・グロスマンもいません。ここに至って、これらの作家が政治に大いに絡め取られたことが、芸術的な創造にとっては一種の新たな束縛であったのだとみなさんが思うのなら、一三億の人口と数千年におよぶ文化的蓄積を持つ同時代の中国が、ど

うしてトルストイやドストエフスキーやチエーホフを産み出すことができないのでしょうか。どうしてカフカやジョイス、プルーストやベケット、カミュやナボコフ、マルケスやボルヘス、そして森鷗外や夏目漱石、芥川龍之介に川端康成、三島由紀夫などの近代日本の偉大な作家たちを産み出すことができないのでしょうか。どうして私たちには今日、往年の魯迅や蕭紅がほとんどいなくて、また往年の沈從文や張愛玲もほとんどいないのでしょうか。

当然、各時代はそれぞれ異なっています、必然的にその時代なりの作家や作品が存在します。しかし今日の中国が置かれた時代と現実、歴史と現下の可能性については、全世界の衆目の認めるところであり、唯一無二であります。豊富な土に変異していて、奇怪でありながら鬱勃としています。人の心の複雑なこと、世事の荒唐無稽なこと、千変万化でしかも安定堅固であり、制度から権力に至るまで、現実から歴史に至るまで、社会から人心に至るまで、それはいずれもこの世

界が二〇世紀において二一世紀のために遺した人類による巨大な奇観であると私は思っています。国が奇異にして、人もまた奇異なるのです。ひと言でいえば、決して政治的、道徳的な基準でもって今日の中国や中国人を判断するのではなく、純粹に文学的な立場に立つて今日の中国を観察し、思考させていたいただきたいのです。そうすれば、きつと次のような二つの結論を得られるはずです。

一、今日の中国は、世界でも極めて唯一無二の国家であり、今日の中国時代の時代は、極めて唯一無二の時代であります。

二、今日の中国人は、世界でも極めて唯一無二の「中国的人類」であります。

そうすると、一つの概念下における二つの実在が存在することになります。その概念とはすなわち「異中国」（他と異なる存在としての中国）であり、その二つの実在とはすなわち「異時代」（他と異なっている時代）と「異中国人」（他と異なっている中国人）であります。換

言するならば、「異時代」における「中国」と異時代における「中国式人類」です。それでは、それに対応する文学はどうなっているのでしょうか。正直に申し上げますと、中国の作家は世界において極めて唯一無二の「異中国」的な中国小説を書けてはいません。私たちは、この国家とこの国家の歴史、現実および「中国式人類」に見合うような文学を持ってはいません。

今日、この「異中国」とそれに隷属する一三億の人口の中で、毎日発生する物語は、百部の偉大なる名著、大著によっても収録、想像しがたいでしょう。しかし私たちは、日々、年々、数十年にわたって、この「異中国」に見合うような『戦争と平和』『罪と罰』『ユリシイズ』『失われた時を求めて』『城』『百年の孤独』『細雪』『古都』『阿Q正伝』『辺城』『呼蘭河伝』のような小説を一部、あるいは数部も書いていません。私が言いたいのは、今日の中国では、他の人類とは異なるものの人類に属していて、しかし他の民族、言語、国には属さない実に無

数の物語が存在し、世界文学に属しているがそれ以外の言語、文化、民族、国に属していない実に無数の文学に関係する人びとが存在していますが、人類および世界文学に属して極めて特徴的な異中国の「中国の物語」と「中国人」を書き得ていません。

異中国（今日の中国）は、文学的な意味から言つて、もう魯迅がいた頃の民国や阿Qの時代には属していませんし、四九年以降の毛沢東時代や改革開放期の鄧小平時代には確かに属していません。その変化と複雑さと荒唐無稽さは、作家にとっては、珍しく膨大で豊富で深刻な「中国の物語」とおびただしい数の「中国式人類」の文学的な人物をもたらししています。しかし、中国文学がこの唯一無二の異中国の異時代に遭遇していても、（少なくとも目下のところ）最も中国的で異中国的な偉大なる物語をまだ真に語り得ていないし、最も中国的で異中国的な「中国人」をまだ描き得てはいないと

私は思っています。

どうしてそうなのでしょう。どのようにお考えになりますでしょうか。私は以下の数点に他ならないと思います。

一、世界文学全体が、すでに人類の文化的創造において衰退し始めていて、中国文学も必然的にこの衰退の一部分をなしているのです。

二、中国はまさに歪曲し、変形し、不規則な「新常态」の畸形期にあつて、金銭、市場、権力とニューメディアによるネットワークの時代が、私たちが言う異中国の偉大なる「中国式文学」と文学における「中国式人類」の創造と誕生に対して、未曾有の誘惑と圧迫を形成しているのである。

三、中国文学全体に自由で緩やかな想像と創造のための環境が不足していることも否定できません。

これらのことが今日の中国文学を構成しているのです。いえ、中国文学だけではありません、それらは日本文学、アジ

ア文学ひいては世界文学全体が向上し、発展し、創造してゆく際のポトルネットワークとなつています。しかしながら、私がかここで本当に言いたいことは、このような時代にあつて、中国の作家には確かに創作する際に、さまざまな障害やポトルネットワーク、不可能なことが存在しているのですが、しかし、私たちはこの百年來で文学にとつては創作のための資源が（創作のための資源であつて、他のものではありません）、最も優れて、最も豊かな時代に巡り合わせていて、半世紀以上もわたつて創作環境が相対的に良好で、ゆつたりとした緩衝期に巡り合わせているのだということ、認めるべきでもあるのです。しかし、この創作環境が相対的に緩衝的でゆつたりとしていて、また創作のための資源が絶対的に豊富な異中国の時代にあるのに、私たちはどうして世界で最も優れて、もつと豊かでそして最も中国的で異中国的な作品を書き得ていないのでしょうか!? 「今日の中国」と今日の「中国式人類」は、すでに世界で唯一無二の国家、民族で「中国人」である

以上、私たちはどうして文学の面で、今日（現下において極めて独特な「中国の物語」と「中国の人物」）を真に語るこゝとが、書くことができているのか、どうか。どうして極めて独特な「中国文学」を産み出していないのでしょうか。

その原因を追究してみますと、それは、これまで私たちが述べてきたような国情、伝統、文化、権力、検閲が作家にもたらした制約以外に、作家が検閲に対して自覚的になり、適応するようになり、検閲を自ら進んで受け入れる結果、無意識に自己規制をしたり、もともとそれがあたりまえであるかのようになつてしまつたりすることや、それが長期間にわたつて続くことで、作家がその体制に適応して検閲に慣れてしまい、人間や現実、歴史や時代に対する洞察力や個人的な理解力を喪失してしまうことがその原因となつているのだと、私は言いたいのです。言い換えますと、それは、中国文学が直面した現実の卑小さと、卑小さの甘受と本能的な無意識であるでしょうし、作家がまさに文学が卑小なものに

なつた時代にあつて、その卑小さから真に覚醒する者が未だほとんどいないということでもあります。それは、まるで一匹の蟻（作家）が自動車（現実）に轢かれても相変わらず活きている時に、死なずに活きているからといって自らの未来を信じてしまうようなものでありますし、一羽の鳥がある地の空から別の地の空へと渡つていった時に、それができたからということ、海の果てや北極も含めて、あらゆる土地の空が自分の空に属しているのだと信じてしまうようでもあります。そのため大地を前にして、蟻は卑小さを知らないがゆえに自らを卑小に思うことがなく、宇宙を前にして、鳥は自らの微小さを知らないがゆえに自らを卑小に思うことがないのです。そして文学はというと、中国の文学は今日のような奇怪さ、混乱、豊かさ、唯一無二であることを前にして、時に人びとの笑いの種になり、また時に人びとに尊敬される異中国の中国式の時代や現実と歴史における中国式人類となり、中国文学は理解の可能性と能力をほぼ喪失してしま

い、知らず知らずのうちに、渾然としたまま得意になってしまっています。そのため、異中国や異時代に向き合う文学の卑小感を失ってしまったもいるのです。そして、作家と文学は現実におけるあの卑小感を失ってしまいました。

中国文学は世界で唯一無二の「中国の物語」を書き得ていないことを自ら卑下することも決してありませんし、唯一無二の異人類の「中国式時代」に身を置きながら、今日の専ら異人類に属する「中国人」を（往年の魯迅がいにひとりの中国人「阿Q」を書き得たようには）未だ書き得ていないことを自ら卑下することも決してありません。文学がまさに異中国の卑小な時代にあるのに、私のような大多数の作家は未だそこから覚醒できずにいて、創作に対して、それが良いことなのか悪いことなのかわからずにいます。覚醒していなくてももしかしたらうまい具合に作家は偉大な中国の物語を語りうるかも知れませんが、それはちょうど

シェイクスピアやカフカが、自らの偉大さを自覚していなかったからこそ偉大な作品を書くことができたのと同様です。しかし、結局のところシェイクスピアやカフカのような天才は、ごくごく少数で、滅多にいるものではありません。一方で、偉大な作家の偉大な作品は、明確な努力の中からこそ産み出されることが多いのです。

そうしたことから、私自身の文学に立ち返って、私個人の創作に立ち返ってみますと、取り上げる価値すらないかも知れませんが『四書』『炸裂志』や、去年完成し、中国で出版できるかどうかはまだわからない『日熄』などがあります。が、この十年になろうとする創作の過程において、一人の作家が異中国の歴史と現実、そして極めて独特な世界における「中国式人類」に直面した際に、洞察や理解ができないという無力感をしみじみと感得するに至りましたし、創作することと出版すること、読むことと批評することという一連の行為が、実はある作家が異中国の最も中国的な「中国式物語」

と「中国式人類」に直面した際に感じる、どうすることもできない卑小さを構成していること、ドン・キホーテと風車のいつまでも止むことのない対峙と妥協、そしてさらなる対峙と妥協という解消する術のない関係を構成していることを感得するに至りました。

最終的には、作家の洞察や理解が異中国の「中国の物語」や文学の中の「中国人」に打ち勝つのではなく、風車がドン・キホーテに打ち勝つのもありません。作家とドン・キホーテは自らの生命に打ち勝つことができないのです。作家自身は、自らの作品が「中国の物語」や「中国人」に直面したときの芸術的価値や芸術的生命を懐疑するのです。スペインの大地に、風は止むことなく吹くものであり、風車は止まることなく回るものであります。一方、ドン・キホーテは、もし生きながらえたとしても、自らの生命と気力を最終的に消耗し尽くして、その槍を風車と大地に引き渡すことなしではいられましょうか。

生命は時間の前では、秋風や寒冬の落

葉のようなものです。また、芸術は時間と大地の前では、一人の人間が墳墓に向き合うように美しいものです。そうでありますから、ここでも、世界の各地でも、みなさんが最も馴染みのある疑問の前では、私はいつも微笑みをたたえて、誠実に篤実に申し上げるのです。今は、中国はずいぶん良くなりました。本当に良くなりました。もし三十年以上前から、文学のために、芸術のために、「書くべきでない」ことを書いてしまえば、牢屋に入れられたり、殺されたり、一家離散したり、一族破滅したりしたのです。それが今日なら、私は元気にここに立っているではないですか。講演したり、観光旅行したり、みなさんと一緒に談笑し、食事をして文学芸術を議論しているではないですか。しかし、それと同時に、私のように一部の中国文学や作家が、異中国を描く困難に直面したときに、妥協して芸術を現実や国家、権力や検閲に譲歩させているだけでなく、さらに重要なことは、私たち自身が異中国、異時代の中で、この異中国、異時代や中

国式人類といった巨大な存在をなおざりにしてしまっているということを、いつも私はよりはつきりと申し上げることにしています。要するに、私たちが偉大な作品を書き得ないのは、第一に問題は自分たち自身にあるのです。文学がこの巨大な異中国、異時代の目を見張るような卑小さに向き合うことを、つまり、作家がこの異中国の卑小さから真に覚醒していないことを、自ら認識していないことにあるのです。

では、あなたは卑小さから覚醒したのではないのですか。

あなたは文学が現実の目を見張るような卑小さに向き合う存在であると認識するに至ったのではないのですか。

そうです。文学が持つこの異時代における眼を見張るような卑小さを確かに認識するに至りました。しかしこの認識は、最近やっと本当にはつきりとし始めたものです。正確に言うのなら、新作『日熄』を書いたことから始まりまし

た。もっと正確に言うのなら、五月に姉からのあの電話を受けたことでより明瞭に、明確になりました。今、この講演のおかげで、私の頭の中で、異中国における「文学の卑小さ」という判断がより明瞭になり、筋道立てられました。言い換えますと、私は半年このかた、作家が持つこの異中国における卑小さをようやく認識し始め、同時にこの卑小さになるほどと同意し、作家という身分で自覚的に自ら望んでこの卑小さを納得して受け入れるようになりました。『四書』と『炸裂志』の執筆と出版を振り返って、出版の可否には、恨みごとを言いませんし、非難はしませんし、思いの丈をぶちまけるようなことなどいいたしません。私の先達、先達である中国の作家たちと引き比べますと、今、私は創作できることに満足していますし、自分が書きたい作品を書けることを喜ばしく思っています。卑小さについての認識や卑小さについての承認を執筆することであると、私のはつきりとわかつているからです。さらに重要なことは、私と私の文学が、異中

国にあるがゆえにもたらされる卑小さというものを、自発的に受け入れようとして始めていることなのです！ 自覚的に受け入れることを通じて、卑小さに対して些かなりとも論理的に分析することができ、些かなりとも救済が得られることを希望します。また、救済される卑小さを通じて、自らの創作が救済され、自らの創作を支えてくれることを希望します。

ここにおいて、卑小さはただ、異中国における存在でただでなく、ある種のより異なつた芸術であり力でもありませんし、ある種の永久不滅な作家と文学そのものでもありません。今日の中国（異中国与異時代）において、作家は卑小であるがゆえに創作し、卑小さのために創作すべきだと、私は意識し始めました。書けば書くほど卑小に、卑小になればなるほど創作する。事情はこうなのです、文学は卑小であるがゆえに存在し、卑小さは文学芸術のために余地を与えてられています。私はというと、異中国の卑小で自覚的な受容者について始めたのです！ 卑小さは、これからは私の文学

のすべてとなるでしょうし、私の生活のすべてでもあります。私と私のすべての文学について言えば、すべては卑小さを抛り所として生まれ、卑小さを抛り所として存在することになるでしょう。卑小さなくしては、私と私たちの今後の文学はないでしょう。卑小さなくしては、過去、現在と未来の関連科という人間は存在しないでしょう。卑小さが彼に存在するのなら、それはある種の生命であるだけでなく、その文学は永遠不滅でもあります。また、彼の未来の人生における生命であり、文学と芸術のすべてであります。

ここで、私はアラビアの『千夜一夜物語』を思い起こします。『千夜一夜物語』のあの有名な「空飛ぶ木馬」の物語のなかで、木馬はもととはどこにもあるような木馬でできた馬なのですが、人が作つたその木馬の耳の後ろには、小さいな木釘があつて、その木釘をそつと押しさえすれば、木馬は天空へと飛び立

ち、遠くでも、どんな場所へでも飛んでゆくのです。今、私の文学と卑小さは、その小さいな木釘ではないかと思うのです。私の文学は、この木釘のおかげで私を連れて天空へ舞い上がり、どこかへ飛んでゆくことのできる木馬ではないかと。私と私のこれからの文学に関して言うと、私が卑小さを失つてしまえば、私の卑小さが人にすっかり奪い去られてしまえば、その木馬はもしかしたら本当に死んでしまい、本当にどこへも行くことができなくなるのではないかと私は思うのです。そういうわけで、私は今は卑小さに絶えず感謝しています。卑小さがあることに感謝し、卑小さのおかげで私が創作を続けてゆけることに感謝しています。また、創作することで、より大きく成長した作家の内心にある異中国与異時代におけるあの巨大な卑小さに感謝しています。その卑小さは、ここにおいて生活も創作も出版も読まれることも超越します。とりわけ、私たちが言う権限、規則による制限、そして作家の生存をも遙かに飛び越えて、異時代における一人の

人間の生命そのものに、または一人の作家の創作そのものになつてしまいません。それはもつて生まれたものでもあり、きつと私と終生ともにあるものでしょう。そのため、そのおかげで私はその飛翔する木馬から、木馬がたどり着きうる他所の遙か遠い国の宮殿を思い起こすのです。

ある日、皇帝は一人の詩人（作家）を連れてその迷宮のような宮殿を訪れます。その複雑な構造の、雄大で壮観な宮殿を目の当たりにして、詩人はしばし沈思黙考して、短詩を一篇吟じました。その極めて短い詩は、宮殿のすべての構造と建物と調度と一切の草花樹木を歌い込んだものでした。そこで、皇帝は大声で叫びます、「詩人よ、お前は余の宮殿を奪い去るのか！」と。そして、死刑執行人が手にした刀を振り下ろし、この詩人の命は絶たれてしまいました。この『皇帝の寓言』では、詩人や作家の生命は失われてしまいます。しかし、それは悲劇なのでしょう。いいえ、違います。断じて違います！ それは悲壮な賛歌で

す。詩人の才華や力量と詩人が持つ宮殿の如く雄壮で美しい天賦を賛美しています。では、私たちはどうでしょうか。短詩は言うに及ばず、長詩、巨篇大作であっても、宮殿全体と宮殿のあらゆる部分の瓦礫や草花を歌い込むことなどできているのでしょうか。

私たちが死ぬのは、一篇の詩が宮殿のすべてを歌い込むからではなく、百篇の詩が異時代の宮殿の瓦一つ、草一本（つまり私たちが今日おぼえる卑小さのことです）を歌い込まないからなのです。それは、文学の卑小さの結果であり、卑小さから得られるものです。それゆえ、私たちは異時代の卑小さのために活きているのであり、異時代の卑小さのために創作するのであり、必ずや異時代の卑小さのせいで死ぬことになるでしょう。

今、私はここに立ち、この厳肅な場所にあつて、多くの友人、先生、専門家、生業を同じくする人たちと、文学について討論し、文学の異時代における卑小さについて討論するには、私と私と似通った作家たちは、中国の現実の「桃源郷」



の中から歩み出でて、真に中国の異時代
に足を踏み入れるようまさに求められて
いるのです。異中国の伝統的な「ユート
ピア」から歩み出でて、もう「菊を采る
東籬の下、悠然として南山を見る」で
あったり、「今夕何れの年か知らず」「錯
いて異郷を故郷となす」であったりして
はいけないのです。私たちは芸術の力を
わが力にし、みなさんの人間、文学、世
界に対する人類共通の愛を唯一の創作の
源としなければなりません。また、卑小
さが絶えることなく、私たちが異中国、
異時代にあっても宮殿の中で独り立ちし
て、自由に笑みを浮かべながら異時代の
宮殿の正門から歩み出ることができると
うに、また、詩人が宮殿の中でも、宮殿
の外でも活きることができるよう、ま
た、境界の内でも外でも、彼（彼女）の
書くものが、可能な限り権力を超越し、
国家を超越し、あらゆる制限を超越し
て、人間と文学の生命、人間らしさ、そ
して精神そのものに回帰するように、ま
た、詩人や作家が活きて吟誦し続けるこ
とが可能になるだけでなく、詩人や作家

たちが、卑小さは一種の異時代の生存、
生命と実在であるとともに、一種の真正
なる理想、力そして芸術の永遠でもあ
り、芸術の永遠に続く未来であると信じ
られるように、卑小さに慰めを与え、卑
小さに生命の力と希望と未来を与えなけ
ればなりません。芸術の芸術たる偉大さ
や恒久性のおかげで、作家は今後も異中
国、異時代において卑小さを認識し、卑
小さに自ら甘んじ、卑小さを受けとめ、
そして長期にわたりひいては永遠に卑小
さゆえに創作し、卑小さのために創作す
るのです。

〔付記〕 本講演会は、中国現代文学研究者
懇話会・愛知大学国際問題研究所・愛知
大学現代中国学会の主催によりおこなわ
れた。開催にあたっては公益財団法人大
幸財団学会等開催助成をうけた。